

●イタリアのコミュニティづくり——その伝統・ 基盤を学ぶ

『違和感のイタリア——人文学的観察記』（八木宏美著、
新曜社、2008年9月、2,835円）

勝山 善介（編集者）

2010/01/26

初出：<http://e-kyodo.sakura.ne.jp/candc/100126essay-16.htm>

●12年連続して3万人を超える日本の自殺 ——コミュニティの喪失・無縁社会の進行

時事通信の報道によると、「昨年の自殺者、5番目の多さ＝504人増の3万2753人」（1月26日）と大変な事態が進行している。「自殺者数が3万人を超えるのは12年連続。男性が2万3406人（71.5%）、女性は9347人だった（中略）、都道府県別では、東京が2989人で最も多く、大阪1982人、神奈川1798人、埼玉1796人、愛知1623人と続いた」と。

この現実、新年明けからNHKテレビの夜・9時からのニュースで特集していた「無縁社会」の急速な進行がある。

街々で、新しいコミュニティをどのようにつくっていくか——、私が参加している「さいたま高齢協」の大きな課題として受け止め

ている。

そのためアメリカ型経済ではない「社会的市場経済」システムを取り入れている、EU・ヨーロッパ社会について、再勉強を始めているが、「孤独死や育児ノイローゼ、社会からの疎外感、高齢者の困窮などは社会問題としてほとんどマスコミの話題に上らない」国として、イタリアを紹介している本に出会った。

それは、『違和感のイタリア——人文学的観察記』（八木宏美著、新曜社刊、2008年9月、2835円）。

以下引用としては長いので著者の了承を求めたいが、手立てがないので、本を購入していただきたい。

●80年代末に訪問した、トリノの「協同組合レストラン・人民の家」

編集子としては、イタリア社会の社会的協同組合システムが、同じコミュニティづくり・状況をつくりだしているのではないかと想像している。

私がイタリアのトリノに訪問した（ヨーロッパを席卷する超モール街付のオランダ・ベルギーなどの外資系ハイパー・スーパーに負けないで健闘するイタリアのピエモンテ消費協同組合の調査）1989年の折、「協同組合レストラン・人民の家」を紹介された。

そこでは以下の点が注目された。

1 毎晩、レストラン（ビール・食事つき）でおじさん風の層の人が、トランプ遊びやダーツなどでつどう遊び場であり、暇つぶしの談笑の場となっている。

2 旧市内にあり、大きさは、ほぼ20畳ほどの部屋が複数あったこと。

3 この人民の家は、協同組合で作っている。話をしてもらった年配の幹部は「ロッチデールより古い」と。

4 紹介していただいた「ピエモンテ消費協同組合の幹部」（1960年代末の「暑い夏のミラノ・オペラ座のたたかい」を学生時代に経験していた。日本風にいえば「団塊の世代」で私と同時代の人）は、「われわれはここには来ませんが」、といていたのを記憶している。

「戦後世代のたまり場」で、フィアット労働者など「55歳年金世代」（現在では日本と同じで労働者年金は65歳支給）が、憩う場なのだと、当時思った。

5 同世代の幹部は、「これからはテレビ社会になっていくので、どう続けていくのか」と話していたのを記憶する。

6 「人民の家」や「協同組合立いこいの場」が現在も続いていたとしたら、以下のイタリア・カトリック教会の伝統的コミュニティ・システムとどのように関係を持っているのか、知りたいものだ。

しかし、その連関はどうもわからない。

▽以下が引用文

すぐれた社会問題対処システム

カトリック教会は、信者数世界一を誇る世界最大の宗教団体である。（中略）

イタリア人のすべてが参加する地域コミュニティの社会システムなのである。

誕生から葬式に至るまでのすべてを地域コミュニティ住民全体で互助



的に生きるこのシステムは、具体的には、婚前心得教室、出産心得教室、子育て教室、思春期の子を持つ親教室、性教育、青少年モラル教育、ボランティア活動、少年サッカーチーム、各種スポーツクラブ、読書クラブ、コース同好会、サマーキャンプ、海外旅行も含む各地への団体旅行、各種レクリエーション活動、養子縁組、里子制度、共働き支援学童保育、老人クラブ、高齢者互助サービス、各種祭りや仮装行列、コンサート、講演会、お食事会など実に多義多彩な社会活動の大部分

を担っている。

それぞれの住民が、まったくの自然体で可能な時に可能な範囲で参加協力し、すべてを無料もしくは実費負担や有志カンパで賄いつつ実際に機能している、実にすばらしい社会システムなのである。北欧諸国の高税金、高福祉、全市民平等扱い型とはまったく発想の違う社会問題対処システムでもある。

ここで注目すべきは、ただの地域コミュニティではこうはうまく機能しない点である。宗教的モラルはどの局面でも各自に反省を促す効果を生み、すべての調停を可能にしている。中心核として神という絶対的存在と高度なモラルを”努力目標”として持つことが、全システムを機能させる決定的条件となっている。教会は平均三〇〇〇人ほどの規模のそれぞれの地域社会の文字通りの基盤であり、神父は住民の実質的・精神的な生活クオリティ向上のために専任で働く専門職、地域住民生活の総合コーディネーターなのである。金持ちにはなれなくとも住居と一生の生活が保障される神父職は、実にやりがいのある仕事であり、脱サラ組のなり手なども結構いるのである。

イタリアでは孤独死や育児ノイローゼ、社会からの疎外感、高齢者の困窮などは社会問題としてほとんどマスコミの話題に上らない。同じ少子高齢大国であり、大きな格差社会であるにも関わらずのこの差、一〇万人中の自殺者率が日本の五分の一ほどで推移していることなどは、確実にその具体的効果の現れであると言えるのではないかと思う。ちなみに北欧三国の自殺率はイタリアの倍である。一朝一夕にできるシステムではない。イタリアが二〇〇〇年をかけて育ててきた世界に誇るシステムである。カトリックコミュニティの伝統は、効率や合理性、経済性の追求とはまったく方向の異なる、人間味あふれる関係の模索を今日も黙々と続けている。

カトリック教の世界観はイタリア人の価値観の土台となっていて、職業や産業構造、資本主義、戦争に対する態度にまでも色濃く影響を与えているのである（『違和感のイタリア』、p 82～p 84）。

「ARCI」(アルチ)」については、1980代から佐藤一子(東京大学)さんが日本で紹介されている。

佐藤一子『イタリア文化運動通信』合同出版 1984年

佐藤一子『NPOの教育力』東京大学出版会 2004年

人民の家と協同組合が一緒に作ったARCI（アルチ）については、以下を参照。

▽イタリア余暇・文化協会について

フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』より

イタリア余暇・文化協会 (Associazione Ricreativa Culturale Italiana、略称ARCI=アルチ) は、人民の家 (Casa del popolo) とそれを基盤にして結成されたイタリアにおける全国的な文化運動団体である。

労働組合、協同組合などを基盤にした数百箇所の人民の家のメンバーとサークルが、自分たちが展開する余暇活動、文化、スポーツの活動の自主性と自立

性を守るために、1957年にフィレンツェで初めての全国集会を開き、そこで組織として結成された。旧共産党系との繋がりを色濃く残している。

今日では、一人一人の市民、サークル、サークル連合、人民の家、文化・スポーツの各種団体の加盟する巨大な組織に成長し、加盟のグループだけで13,000団体、会員が120万人を越える。

他にこうした文化・スポーツの活動団体としては、教会教区系のイタリア勤労者キリスト教協会(ACLI=アクリ)もある。両者は当初の時期は、対立的であったが、今日では積極的に協力し、共同でイベントを企てるという協調関係を持っている。

スローフードの運動は、この中の食に関する活動団体から生まれてきた運動である。